

2021年10月17日 半田朝礼拝

午前9時・午前10時30分

司会 天沼康司

奏楽 永井 花

前 奏

招 詞

I コリントの信徒への手紙 第1章19節—20節

讃美歌

讃美歌 21-13-6 (世界を治むる)

交 読

詩編 第27篇 (p. 28)

祈 禱

聖 書

マルコによる福音書 第14章66~72節

(新約 p. 94)

讃美歌

讃美歌 21-342-1 (神の霊よ、今くんだり)

説 教

「神の光の中で」

まずここで、心に留めておきたいことがあります。それは、同じ時間の間にもうひとつの出来事があるということです。登場する人たちは、イエスさまであり、大祭司であり、最

高法院の人たちであり、そしてペトロです。舞台を二つに分ければ、まずイエスさまの裁判が行われており、もう一つは、ペトロと彼を取り囲む人たちがいます。イエスさまの裁判と同時進行で、今日のここでのペトロの物語が続いて起こっています。同時に起こっていても、同時に書き記すことはできませんから、マルコはまずイエスさまの裁判の出来事を書いた後、一区切りつけて、さあその頃ペトロに何が起こっていたのかと、今日の記述が始まります。

少し前置きが少し長くなりましたが、二つの対照的な出来事が同時に重なっているということに深い意味があります。まず二人の主演、イエスさまとペトロです。イエスさまは毅然とした態度で、自分の信念を曲げず、どれだけ周りから糾弾され辱められ、死刑判決を受けても、揺るぐことがない。ところがペトロは、死ぬまでついて行きますと言いながらも、イエスの仲間ではないかと言われて、驚いて逃げ腰になっている。ただマルコによる福音書は、ここで二人の紹介と、その二人がど

のような道を辿るのかということだけを語れば、それで充分とは思っていなかったようです。

たとえばペトロは後に教会の指導者になりました。使徒言行録には聖霊が降った出来事の後、ペトロが堂々と説教している姿が記されています。このマルコによる福音書は、ペトロの個人的な記憶に基づいていると言われますから、もしかすると、今日の出来事についてペトロ自身は、自分が泣き出してしまった、この夜の出来事を語ったから福音書に記されるようになったのだらうと思います。では、どうしてペトロは語ったのだらうか。誰も知らないはずだから黙っていても良かったのかもしれない。でもそうしなかったとすれば、その理由はなんでしょうか。

この、ペトロがイエスさまを否認した物語は、とてもよく知られていますし、わたしたちが何度聞き直しても、そのたびに新しい気づきが与えられるものだと思っています。たとえ

ば、54節には「ペトロは火にあたっていた」と書かれています
が、これが今日の67節でも繰り返されて、「ペトロが火にあた
っているのを目にすると」となっています。「火にあたってい
る」というのは、もちろん自分を暖めている、という意味で
す。ところが54節の方では、何によって暖めているかとい
うと、「光で自分を暖めていた」と、「光」という言葉が使われて
います。ところが、67節には、光という言葉はなくて、単純
に、ただ火にあたっているところを見咎められたと書いている
だけです。「光にあたっている」というのは、不思議な言葉で
す。光を火という意味で使うこともあります、やはり不思議
な使い方です。普通に言えば、暖めるのは火で暖まるのであ
って、光に暖まるとはあまり言わない。もちろん火が燃えてい
ると明るいからです、その明かりを燈火がわりに使うことはあ
ります。光という言葉が火の燃えているところを意味する場合
もあります。ただ、どうしてここでそういう表現をわざわざ使
ったのだろうかと思います。

想像ですがペトロはイエスさまのことが心配で一度は逃げ出したけれど、後をついて来て、とうとう大祭司の家の庭まで入って来てしまった。どうなるのかと待っている間、やっぱり寒かったのだろうと思います。庭にいた下役たちが火にあたっていたら、そっと近寄って行ったのだろうと思います。もちろん恐る恐るです。ただこのとき、ペトロは、その光が自分を照らし出す光だということに気づいていなかったのかもしれない。隠れてこそこそついて行った自分の姿を照らし出す光だということに気づいていなかった。ところが、自分の体を暖めているのは、単なる火ではなくて、自分の姿を明らかにしてしまふ光だということに突然気づかされる。あなたは、あのナザレのイエスの仲間だろう、一緒にいるのをわたしは見たんだよと、女中の一人から言われてしまいます。それに対して答えたペトロの言葉はこうでした。「あなたが何のことを言っているのか、わたしには分からないし、見当もつかない」。

実はここでのペトロの言葉は、文法から見ると、かなり

滅茶苦茶な言葉だそうです。落ち着いて語った言葉ではないということです。そしておそらく、ペトロはよく覚えていたのだと思います。自分がどんなに慌てていたか、しどろもどろの言い方をしていたか。身に沁みて覚えていた慌てぶりだったのだろうと思います。しかも、そこから話が始まって、ペトロはどんどん深みに入っていきます。光のそばで見つかってしまったのですから、その光から闇へと逃げ出します。出口の方へ出て行きます。出口の方というのは、そこにいるのを止めようと思えばすぐにでも、出て行くことができる場所だった。そして、もうひとつは、光から遠ざかることでした。暗い所、自分の身を隠そうとしました。ところが、この女中はなかなかしつこい。後をついて来る。そして、まだそこにいる人たちに、「この人は、あの人たちの仲間です」、イエスと一緒にいた、あの人たちの仲間ですと言いました。ペトロは再び打ち消します。ところがとうとうこの女性だけでは済まなくなります。周りの者も言い出す。あなたの言葉にはガリラヤ訛りがある、確かに、この人の言う通りだ、あなたはナザレのイエスの仲間だ。

この後、びっくりする言葉を語ります。「すると、ペトロは呪いの言葉さえ口にしながら、『あなたがたの言っているそんな人は知らない』と誓い始めた」。この「誓う」とは、神さまに誓う、神かけて誓うという意味です。「呪う」という言葉も信仰的な表現です。滅多に口にしてはいけない言葉です。一つ、ここで気になるのは、ペトロがいったい誰を呪ったかが書かれていないことです。普通、呪うと言えば、誰それを呪うと書きます。ところがここでは、誰を呪ったか書いていない。そこで、昔からここを読む人たちは、いったいペトロは誰を呪ったのだろうかと考えました。わたしたちは誰のことだと思いませんか。自分を問い詰めている人たちを心の中で呪ったのでしょうか。たぶん、そんな勇氣はなかつただろうと思います。ここでペトロは慌てています。主イエスが退けられるのと同じように自分が退けられたら、たいへんだと思っています。そういう不安、恐怖があります。当然です。だからペトロは、とんでもない、わたしだってあなたがたのひとりです、そう言いたくなっ

た。相手を呪うことはできない。だとすれば、誰を呪ったので
しょうか。昔からのひとつの理解は、ペトロが自分自身を呪っ
たと考えました。どうして自分は、あのイエスについて来てし
まったのだろうか。わたしについて来なさいと言われた時に、
どうして断らなかったのだろうか。ほんの少し迷っても、その
思いを振り切ってついて来てしまった。危ないと思った時に、
どうして見切りをつけなかったのだろうか。他の弟子たちのよ
うに遠くから見ているだけにしておけばよかったのに、どうし
てここまで来てしまったのだろうか。ペトロ、お前は何て浅は
かな、駄目な人間なんだ。愚かなお前に生きる価値はあるの
か。そんなふうに分の人生を呪う。「呪う」ということは、自
分自身の人生は祝福の中にないと認めるということです。神さ
まの祝福から切り離すということです。これは誰のことでもな
い。わたしたちは何度それを思うのでしょうか。自分が、神さま
の祝福の中にあるということ、受け入れることができなくな
ります。いったいこれを何回繰り返すのでしょうか。

そして、もうひとつの理解があります。それはイエスさまを呪ったという理解です。そんなことがあるだろうかと思うかもしれません。自分を呪うのはまだわかるけれど、イエスさまを呪うということができるのだろうか。けれど、あり得ないことではありません。どうしてこのイエスについて来たのかと思うのであれば、どうして、この人はわたしに声をかけたのかと恨むことはいくらでもできるからです。恨むということは、相手がいなくなってしまうでもいいということです。この人は、神さまの祝福なんか受けるはずがないと言ってのけることです。どうして、イエスはわたしを捕らえたのか。どうしてイエスは、わたしを弟子にすると言われたのか。そのおかげで、わたしは自分の人生を無駄にしたのではないか。もうガリラヤの湖に戻っても昔の自分には戻れない。それはイエスよ、あなたのせいだ。自分を否定するということは、自分を祝福の中に捕えていてくださる神を否定することですから、イエスさまを否定することになります。そしてそのことによって、ペトロは、やはり自分自身を呪っている。神とキリストと自分と、こ

れまで深く関わり合っていたものを、すべて断ち切って、自分自身をも殺してしまうようなことになる。光から遠のいたペトロ、自分をはっきりと映し出す光から遠のいたペトロは、まさに闇の中に立ってしまいます。

このことは教会の人たちにとって、他人事ではなかったはずです。いつも迫害の戦いにさらされている自分たちであることを知っていたはずです。何よりもこのペトロが、今自分たちの牧師です。このマルコによる福音書がいつ頃書かれたのか、必ずしもはっきりしていませんが、ローマで書かれただろうと言われます。ペトロの最後がどのようなであったか、それもよくわかりません。ただほぼ誰もが認めているのは、ネロ皇帝の迫害の時に、殉教の死を遂げただろうと言われます。そうすると、当時の教会の人たちは、自分たちの目の前で迫害に耐えて、イエスさまのあとを、真実に追って死ぬことができたペトロ、そのペトロがかつてイエスさまを呪った、自分自身の存在を呪ったのだということ、その事実を、どれだけ深い思いで思

い起し、そこでなお神の恵みを改めて知って、その跡を辿ったかと思います。

ここで女性が最初にあなたはイエスと一緒にいたと言った時には、何でもない対話だったかもしれません。ペトロが「そうだよ」と言えば、それだけで済んだかもしれません。ところがペトロはそこで怖くなってしまった。それには理由もあると思います。たとえば、使徒パウロがコリントの教会に宛てた手紙の言葉を思い起す人もいます。「十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力です」(Iコリント 1:18)。誰にとってもイエスさまが裁かれ、十字架につけられて、死んでいく姿ほどむなしいものはなかった。愚かなことはなかった。そこに神の祝福があるのだと言われても、誰も信じることができなかった。いったい、どこに神の愛があるのか。人々から唾を吐きかけられてただ耐えているだけの、このみすぼらしい人間のどこに、神の愛が宿っているのか、ということだったかもしれません。滅んで

いく者は、裁かれているイエスと、その十字架に、神の知恵を見て取ることはできない。だとすれば、この女性だけを笑うわけにはいきません。何よりもペトロがそうでした。ペトロがイエスさまにつまづきました。ついさっきまで、力を込めて、わたしはあなたと一緒に死んで見せますと言ったペトロが、ここで、その愚かさに耐えることができなくなってしまいました。

そうすると、ペトロの道は完全に塞がれているように見えます。ところが、その塞がれていると思っているその先に、「いきなり泣き出した」との言葉で終わります。この時、どうしてペトロが泣き出したのか。イエスさまの言葉を思い出したからです。わたしの言った通りだろう。鶏が鳴く前に、あなたはわたしのことを三度知らないと言う。全く完璧に、わたしを否認する、最後には呪いさえ口にする。イエスさまはそのことを見抜いておられました。そのイエスさまの言葉を、ペトロはこの時畏れるばかりだったかもしれません。恐れと恥ずかしさの中で、自分自身を隠して泣いたのです。おそらく、この涙

は、ずっと続いたと思います。そして、その涙を神は見守られたはずで、甦られたイエスさまは、このペトロを訪ねます。そして皆で祈って待ちなさい。神の約束の聖霊が、あなたがたに注がれる。そう約束されました。聖霊が降ったということは、この崩れて、涙の中で祈り始めたペトロに対する神さまからの答えでした。

使徒言行録の第2章には、最初の教会が形作られた時に、教会の代表者となったペトロが、どんな説教をしたのかが記されています。そして、このペトロの説教が一区切りするところで、この言葉が語られています。

だから、イスラエルの全家は、はっきり知らなくてはなりません。あなたがたが十字架につけて殺したイエスを、神は主とし、またメシアとなさったのです。

あなたがたが十字架につけて殺したイエス。パウロは「木につけられた者はのろわれる」という言葉を、ガラテヤの

教会に宛てた手紙に書きました。イエスは呪われたのだと書きました。ペトロも、そのことをここで語りました。あなたがたが十字架につけて呪い殺した。けれど、ここでペトロは、自分のことも含めて語ったと思います。わたしも呪った。この方を呪ったのだ。そしてそのイエスを神はわたしたちの主として立ててくださったのだ。神の子メシアであることを明らかにしてください。ペトロは、こういう言葉を語って、あなたがたが十字架につけたのだと、大祭司やその他の人たちの罪を糾弾しているではありません。他人の罪を糾弾するというのは、自分の罪を忘れた者だけはすることのできることです。

教会には、十字架だけではなくて鶏を屋根につけているところもあります。鶏は暁を告げる鳥、いのちの朝を告げる鳥です。まだ暗闇なのに、もう主イエスの甦りのいのちが、支配し始めていると、望みを告げる教会の務めを示すものだと信じたからです。そしてもうひとつ、この鶏はペトロの裏切りを、そして、わたしたちの神さまからの祝福をいつも否定してしま

う心を言い表すものでもあります。ちょうど十字架がわたしたちの罪を表すものとして掲げられるように、鶏を教会の建物の上に仰ぎ見るとき、ペトロを思い起しました。そして、なあんだ、ペトロ先生は弱虫だったのか、と言うのではなくて、わたしたちもまた神さまの祝福を否定しないように、神さまの祝福の中に何度でも帰って行かなければならない、と思い起すためです。

このペトロの出来事は、教会の歴史の中で大切にされてきた物語の一つです。そうだろうと思います。わたしたちも皆、このペトロの涙の重さを知っているからです。そしてその涙が、神さまの大きなみ手の中で、どれだけ軽やかないのちの輝きを、光を帯びることになったのか。ペトロはもう暗闇を求めることはなくなったからです。祈ります。

主よ、わたしたちは、あなたの光の中に、光を見ることが出来ます。不思議なことに、光から逃れたペトロが、人々に

光を指し示す者となって立つことができました。そんなふう
に、主に従う者となることができました。けれどこれは、ペト
ロだけではありません。わたしたちのことでもあります。その
ためにもどうか、わたしたちもまた、ペトロの流した涙の重さ
を知り続けることができますように。わたしたちを包む、あな
たの大きな御手と、その愛をいつも明らかに示してくださる聖
霊を注いでください。その働きを確信させてください。

主イエス・キリストのみ名によって祈ります。 アーメン

讃美歌 讃美歌 21-454-1 (愛する神にのみ)

献金 讃美歌 21-65-2

報告 週報の3頁を御覧ください。

祈 禱 それぞれの場で黙禱をお願いします。

主の祈り 讃美歌 21-93-5A(天にまします我らの父よ)

祝 禱 平和のうちに、この世へと出て行きなさい。

主なる神に仕え、隣人を愛し、
主なる神を愛し、隣人に仕えなさい。
主イエス・キリストの恵みと、父なる神の愛と
聖霊との親しき交わりとが、
あなたがた一同と共にあるように。 アーメン

後 奏

<礼拝終了>